

古川祭

平成の合併ブームにより、古川町は合併して飛騨市となった。「岐阜は木の国・山の国」と岐阜県歌は歌うが、それは飛騨のことである。司馬遼太郎は「街道をゆく・飛騨紀行」で飛騨を隠国(こもりく)と表現する。そして、「生産性が低かったればこそ、文化が沈殿し、いい酒のように熟成された」と言う。その熟成されたいい酒が古川の町並みと祭だ。

古川の町並みの美しさは秀逸だ。この町並みの美しさを見出し、伝統的な町並みを残す運動をはじめられた東京大学の西村幸夫さんに影響され、私は犬山城下町の拡幅を止め、景観条例を考え、歩いて巡る町づくりを提唱した。町づくりと祭は一体だ。

で、祭のことだ。古川祭は気多若宮神社例祭として4月19・20日に行われ、この祭を盛り上げる起こし太鼓は日本三大裸祭に数えられる。ドーン・ドーンと歴史の闇を突き抜けて古代から響いてくるような巨大な太鼓を中心に、それに近づこうとする裸男たちが揉み合う激烈な祭だ。四月とはいえ飛騨の春はまだ浅い夜中、底冷えの寒さを突き破り、晒し一丁の男たちの醸すエネルギーは祭の持つ野生への回帰そのものである。

古川祭というと起こし太鼓が優先してしまうが、もちろん神輿と9台の屋台巡行がメインであり、未明に祭関係者を起こす為打った太鼓が「起こし太鼓」の起源である。

気多若宮神社のご祭神はオオクニヌシが主神でアマテラスも勧請されたと聞いた。オオクニヌシは日本列島の先住民族の神であり、アマテラスは渡来人の神であるというのは梅原猛氏の仮説である。さすれば、オオクニヌシが主神であるという事は、やはり飛騨は縄文の地、今に残る日本の源郷である。

祭の日、古川の町に入り塩の筋を見た時、気多若宮神社の聖域に入ったと感じた。塩も水や火と同様、神道における重要な記号だ。塩の範囲が祭の行われる聖域であり、気多若宮神社の縄張りなのだ。

因みに、相撲は完全に神道のメタファーである。力士は清めの塩をまき、四股を踏むのは地の神を鎮める神事と聞く。

九台の「屋台曳き揃え」も見事で、伝統的な町並みに溶け合い美しい。飛騨の匠という言葉があるように、屋台の作りはしっかりして、まさに日本の木工芸の極みを見る思いだ。神輿と屋台巡行の露払いのような形で獅子舞が家々に門付けし、屋台の周りで踊ったり、子どもを追いかけて賑やかだ。獅子に噛まれると福が来るともいう。獅子舞は中国やインドから伝わったと聞かすが、このあたりにはシカやイノシシが多く生息するゆえ、獅子の意味はイノシシのことではないかという気がした。

古川は祭も町並みも隣の高山から大きな影響を受けている。高山は極めて磁力があるいい町だが、私は古川により「ガラパゴス」の魅力を感じている。

